

福岡市

東那珂遺跡 2

— 東那珂遺跡第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第460集

1996

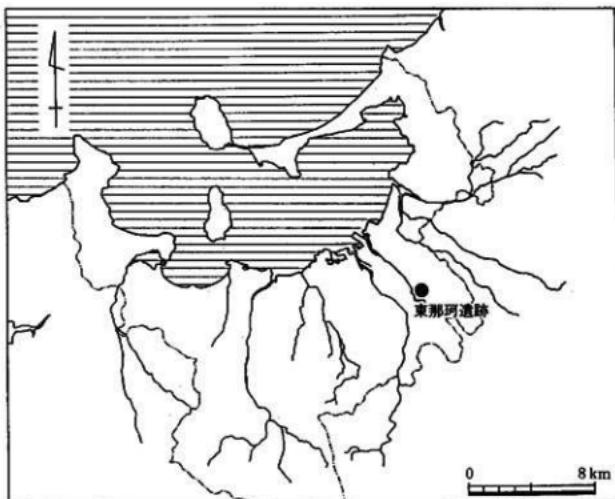
福岡市教育委員会

福 岡 市

ひがし な か
東那珂遺跡 2

— 東那珂遺跡第2次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第460集



遺 跡 略 号 ENK2
遺 跡 調 査 番 号 9406

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、その結果大陸よりもたらされた豊かな文化財が眠る街として知られています。近代都市として今なお膨張を続ける福岡市のなかで、都市化とこれらの埋蔵文化財の保護を両立させ、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりをめざし、これを後世に伝えていくことが、我々の責務であると言えましょう。

福岡市教育委員会では埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は道路建設に伴って実施した東那珂遺跡第2次調査の成果について報告するものです。

調査にご協力を頂いた方々に対し、深く感謝の意を表すとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助となれば幸いと存じます。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　言

1. 本書は平成6年4月8日から5月20日にかけて福岡市教育委員会が行った、博多区東那珂3丁目地内所在の東那珂遺跡第2次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、土木局道路建設第1課が計画した竹下駅前1号線建設に伴う事前調査として実施した。
3. 遺構はSB（据立柱建物）、SD（溝、河川）で表記し、遺構の種別を問わず検出順に連番号を附した。
4. 本書に使用した図の作成は遺構を吉武学（福岡市教育委員会）、正林真由美が、遺物を吉武、西村晴香が行った。
5. 本書に使用した図の製図は吉武、西村、田中克子、大神真理子が行った。
6. 本書に使用した写真的撮影は吉武が行った。
7. 本書に使用した方位は全て磁北である。
8. 本書の執筆・編集は吉武が行った。
9. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

遺跡調査番号	9406		遺跡略号	ENK 2
調査地地籍	福岡市博多区東那珂3丁目地内		分布地図番号	
開発面積	調査対象面積	608 m ²	調査面積	315 m ²
調査期間	1994（平成6）年4月8日～5月20日			

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 古墳時代の遺構と遺物	5
3. 古代の遺構と遺物	6
(1)獨立柱建物	6
(2)河川・溝	8
4. 中世の遺構と遺物	10
5. 包含層出土遺物	11
IV. おわりに	14

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査地点位置図 (1/4,000)	2
Fig. 3 調査区位置図 (1/400)	3
Fig. 4 1区検出遺構配置図 (1/100)	4
Fig. 5 2区検出遺構配置図 (1/100)	4
Fig. 6 調査区南壁土層断面図 (1/80)	5
Fig. 7 SD-04出土遺物実測図 (1/3)	6
Fig. 8 SB-05・06出土遺物実測図 (1/80)	7
Fig. 9 SB-05・06出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 10 SD-03出土遺物実測図 (1/3)	8
Fig. 11 SD-10出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 12 SD-01出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 13 SD-02出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig. 14 包含層出土遺物実測図・I (1/3)	12
Fig. 15 包含層出土遺物実測図・II (1/3,1/4)	12

図版目次

- PL. 1 1. 調査区全景（北東から）
2. 1区全景（北東から）
- PL. 2 1. 1区全景（南東から）
2. 2区全景（南西から）
- PL. 3 1. 1区SD-04（南から）
2. 1区SD-03（東から）
3. 1区南壁土層①（北西から）※東から西へ①→⑤
4. 1区南壁土層②（北西から）
5. 1区南壁土層③（北西から）
6. 1区南壁土層④（北西から）
7. 1区南壁土層⑤（北西から）
8. 2区南壁土層（北西から）
- PL. 4 出土遺物・I
- PL. 5 出土遺物・II
- PL. 6 出土遺物・III

I. はじめに

1. 調査に至る経過

東那珂遺跡は、平成5年度に公団住宅建設に伴う事前の試掘調査で新たに確認された遺跡である。第1次調査はこの事業に対して行われたもので、平成5年10月から調査が行われ、既に調査報告書が刊行済みである。調査では、古墳時代前期および古代の集落跡、中世の水田跡を検出しており、これらの遺構の広がりがどの程度に及ぶかが問題となっていた。一方、この調査とほぼ時を同じくして、南方の道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の事前調査願いが、福岡市土木局道路建設第1課から同教育委員会埋蔵文化財課に提出された。現地は、JR竹下駅から国道3号線に抜ける道路沿いで、事業は渋滞緩和のための道路拡幅であった。埋蔵文化財課では、上記のような理由から事前に試掘調査を実施して遺跡の有無の確認を行うこととし、予定地内の買収を待って試掘調査を行った。試掘調査は平成5年7月1日と16日を行い、事業予定地内にトレソチ数本を設け、一部で遺跡の存在を確認した。試掘調査では、地表下1.4~1.8mで遺物包含層や土坑、ピットを検出し、古代~中世の遺物が出土した。この結果をもとに、埋蔵文化財課では道路建設第1課と遺跡の保存について協議を持ったが、計画道路の変更は不可能であり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、平成6年度の令達事業として実施することとなり、平成6年4月8日~5月20日の間に発掘調査を行った。また、整理報告書作製を平成7年度事業として実施した。

2. 調査の組織

調査委託 福岡市土木局道路建設第1課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾學（前）、荒巻輝勝（現）

埋蔵文化財第2係長 山崎純男（前）、山口謙治（現）

調査庶務 埋蔵文化財第1係 入江幸男

調査担当 埋蔵文化財第1係 浜石哲也、長家伸（試掘担当）

埋蔵文化財第2係 吉武学（調査担当）

調査作業 青柳武、秋山豊、荒木宏隆、石屋四一、内野英文、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、舌間三郎、渋谷博之、二宮白人、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、米倉國弘、金子澄子、唐島栄子、酒井康恵、正林真由美、杉村百合子

整理調査員 田中克子

整理作業 安部国恵、有島美江、井澤早苗、大神真理子、太田富美子、富田輝子、西村晴香、宮坂環

II. 遺跡の位置と環境

東那珂遺跡は、福岡平野の中央部、御笠川東岸の沖積地上に位置する。遺跡周辺の地形は、那珂川や御笠川等の大小河川の浸食によって形成された中低位の段丘と、沖積低地によって構成され、段丘



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

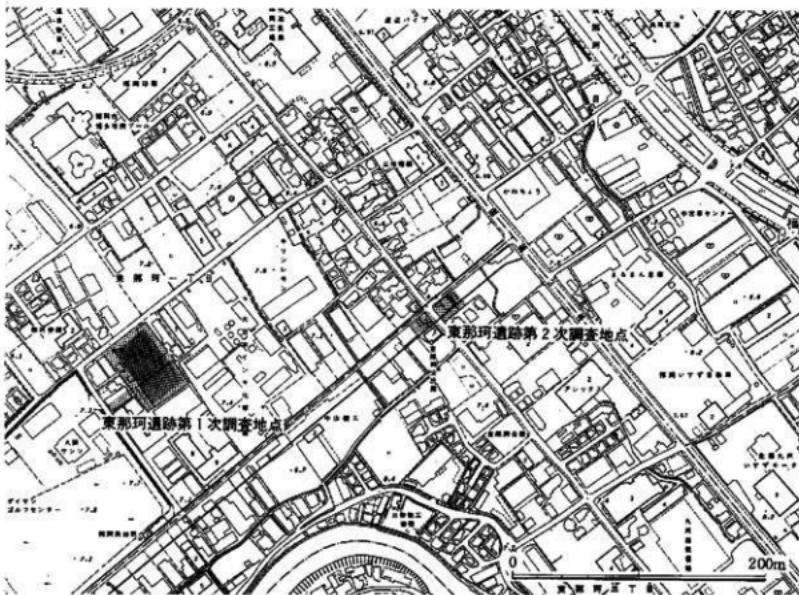


Fig. 2 調査地点位置図 (1/4,000)

上に集落跡・墳墓などの遺構が、沖積低地に水田跡などの遺構が埋没していることが今までの調査で明らかとなっている。東那珂遺跡は沖積低地に形成された微高地上に位置しており、試掘調査によつて遺跡の東西は地形が下がって河川の氾濫原となることが確認されている。古地図によれば、周辺は条理制の痕跡をよく留めた水田地帯であったことが分かるが、現在はあたり一帯が厚く埋め立てられており、宅地となっている。標高は現地表面で7m強、遺構面で6m前後である。

調査地点周辺の主な遺跡としては、まず雀居遺跡があげられる。調査地点の東側約700mに位置するこの遺跡では、弥生時代の大規模立柱建物を確認するとともに、木製籠を始めとする大量の木製品が出土して注目を浴びた。また、土坑を主体とする古代の遺構なども検出されており、木筒等が出土している。また、西側には先土器時代～中世の複合遺跡である那珂・比意遺跡が段丘上に位置しており、弥生時代を主体とする大集落が調査によって確認されるとともに、弥生時代初頭の二重環濠遺構や那の津の官家と目される掘立柱建物群などの遺構が相次いで発見されている。

東那珂遺跡の第1次調査は、平成6年4～5月に行った。第2次調査地点から西に約250m離れたこの調査では、古墳時代前期の堅穴住居跡と土坑、奈良時代末から平安時代初頭の道路状の遺構、掘立柱建物、木棺墓、井戸、土坑からなる集落、中世の水田跡などを検出し、舶載の青銅鏡（破鏡）、越州窯系青磁を始めとする輸入陶磁器、墨書き土器、布目瓦等が出土している。墨書き土器には、底部に「屎丸」と書いた十師器があり、高貴な身分の人物の幼名を記したものと考えられる。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査対象範囲は、旧国道3号線を挟んで東西に分かれるため、東側を1区、西側を2区とした。調査は1区から開始し、漸次2区へ移行した。1区の遺構検出面は標高5.9m、2区の検出面は標高5.3mで、0.6mの段差がある。1区は東側へ緩く下っており、東端部で削平されて一段落ちる。遺物包含層はこの傾斜面に形成されており、東に向かって層が厚い。また2区は逆に西へ下っており、西端に古河道がある。2区の包含層は遺構面の上面に厚く堆積しており、3層に分離できる。当調査区内における地形の最高所は1区の西半部にあり、東へ緩く、西へ急に落ちる地形であるといえよう。

遺構は主に1区において検出した。2区は古河道とピットを検出したのみである。検出遺構は、古墳時代

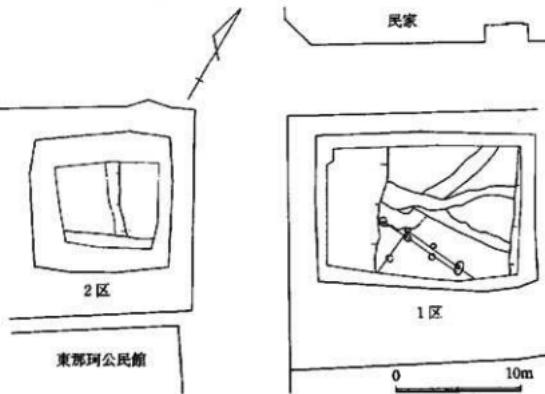


Fig. 3 調査区位置図 (1/400)

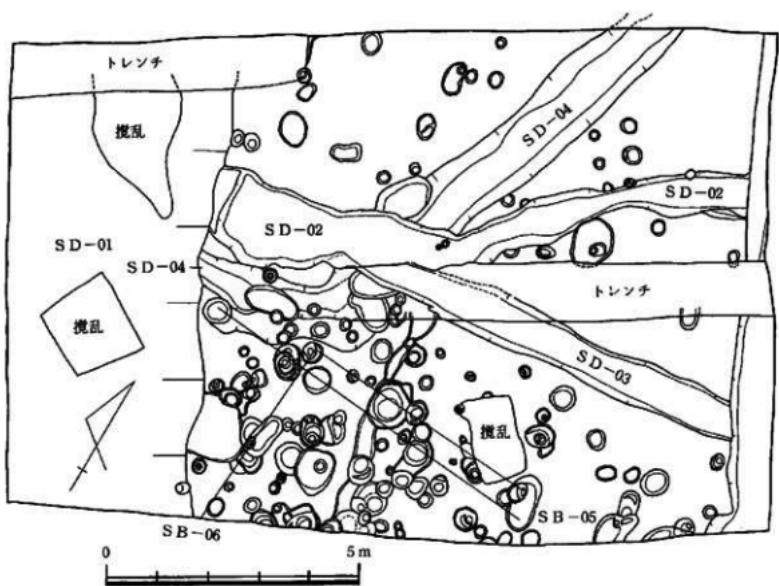


Fig. 4 1区検出遺構配置図 (1/100)

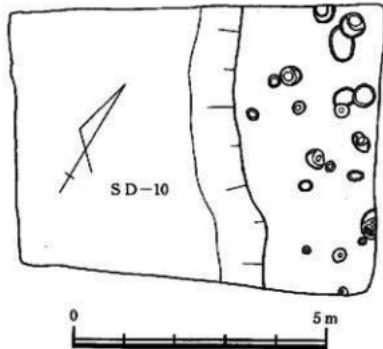


Fig. 5 2区検出遺構配置図 (1/100)

前期の溝状遺構1、古代の掘立柱建物2、溝状遺構1、古河道1、中世の溝状遺構2である。調査区のはば全域に遺物包含層が広がっており、中世の遺構は包含層上面で検出した。また、古代、古墳時代前期の遺構は、包含層を除去した面で検出した。中世の溝状遺構は水田水利のためのものと見られ、包含層は中世の水田造営時の整地層と考えるのが妥当であろう。

遺物は主に包含層から出土した。量的にはコンテナにして約10箱である。時期的には奈良時代末から平安時代初頭にかけてのものがほとんどを占める。特記すべき遺物としては、古代の白磁、瓦、移動式のカマドなどが挙げられよう。

2. 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、溝状遺構を1条検出したのみである。

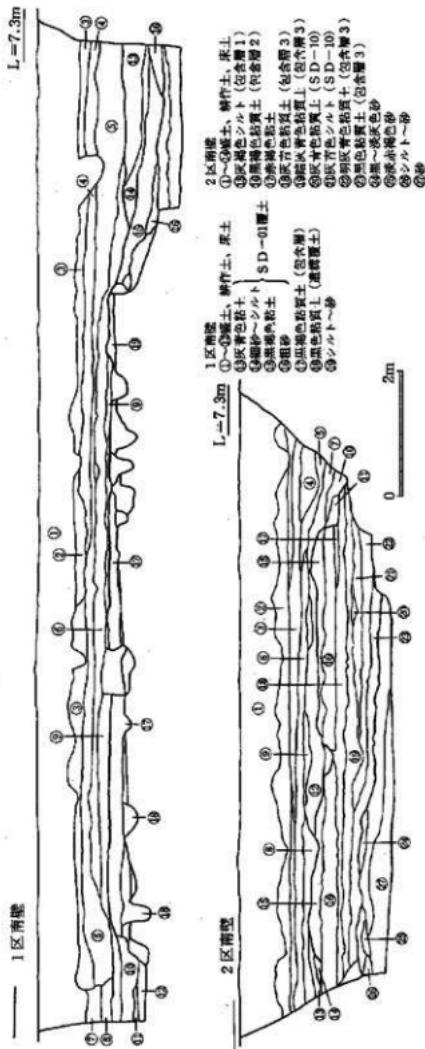
SD-04 Fig. 4 PL.3

1区の北半部に検出した溝状遺構である。調査区の中でL字形に曲がる。一方は北へ、他方は西へ掘削しており、北側は比較的残りが良いが、西側は後世の遺構に切られて残りが悪い。北側で9m、西側で3.5mの長さを確認した。幅は北端部で1.2mを測る。断面形は皿状を呈し、最も残りの良い部分で深さ0.25mを測る。覆上には黒褐色の粘質土が堆積していた。

出土遺物は土師器片が10点であるが、中世の溝SD-01と切り合う部分で出土した明らかにSD-04に伴うと見られる土師器もここに取り上げた。古墳時代初頭の遺構である。

SD-04出土遺物 Fig. 7 PL.4

全て古式土師器である。1は菱形土器で、口縁部と底部を欠く。胴部は倒卵形をなし、最大径はやや上位にある。調整は外面が刷毛目、内面がヘラ削りで、内底部には指頭痕を残している。淡黄褐色～黒褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好である。2、3は二重口縁壺の口縁部片である。2は頸部が屈曲して直立気味に立ち、口縁部は外側に屈曲して開く。口縁外面に断面三角形の突帯を貼付している。横ナデ調整し、胴部内面



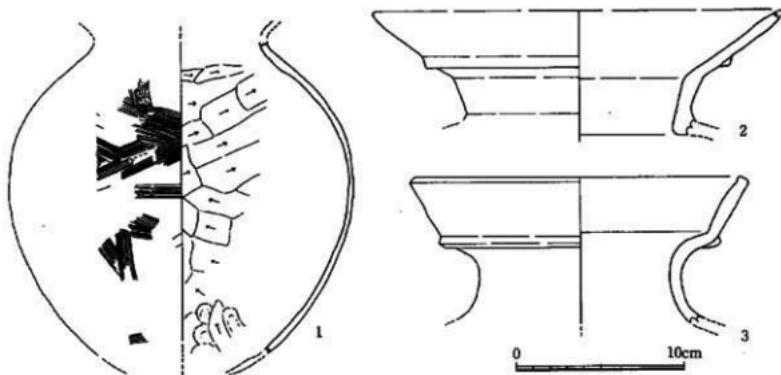


Fig. 7 SD-04 出土遺物実測図 (1/3)

にはヘラ削りが見られる。明橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。口縁端部を欠くが、復元口径は24cm程度か。3は頸部が屈曲せず丸く外湾して立ち、口縁部が内側に屈曲して開く。三角突帯を屈曲部に貼付し、口唇部は面取りして平坦につくる。頸部内面にヘラ削りを施した後、全体を横ナデする。淡橙～淡灰色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。復元口径20.1cm。

3. 古代の遺構と遺物

(1)掘立柱建物

掘立柱建物は2棟復元した。他にも柱穴と見られるピットが多数あるが、掘立柱建物としてまとめるに至らなかった。ここに取り上げた掘立柱建物も全容を知ることのできるものではなく、狭い調査区ではこれ以上の復元は困難かと思われる。

SB-05 Fig. 8

1区南半部に検出した。東西方向に4本の柱穴が並んでおり、南側の調査区外へ展開する掘立柱建物と考えられる。4本の柱穴は他の柱穴と比べるとやや径が大きい。主軸方位はN-87°-Wで、全長は3.66m、柱間は東から、1.2m、1.2m、1.22mのはば等間である。柱穴は円ないし椭円形プランを呈し、径は25～56cm、深さは7～16cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

柱穴掘方からは古代の土師器、須恵器の小片が少数出土した。

SB-05出土遺物 Fig. 9

4～6が柱穴より出土した。4は須恵器蓋である。口縁部の小片で、法量は不正確である。口縁はゆるくうねり、端部は軽く面取りされる。淡灰青色を呈し、焼成は良好である。5は鉢の口縁部か。直立気味に立ち、端部は面取りされる。外面に断面三角形の突帯を貼付する。黒～淡灰青色を呈し、胎土には僅かに砂粒を含み、焼成はやや不良である。6は須恵器の甕である。底部に近い破片と思われる。外面に格子叩き、内面には平行線文のアテ具痕が残る。灰青色を呈し、焼成は良好である。

SB-06 Fig. 8

1区南半部に検出した掘立柱建物である。SB-05と重複しており、同時期の建物ではない。調査

区の南区外へと伸展しており、2間以上×1間以上になる建物と考えられる。主軸方位はN-87°-Wで、SB-05と同じである。東西の全長は2.47mで、柱間は東から、1.21m、1.26mを測る。南北の柱間は1.22mである。柱穴は円形プランを呈し、径は20~24cm、深さは12~15cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

柱穴掘方からは古代の須恵器片、移動式カマド片等が少数出土した。

SB-06出土遺物 Fig. 9

7が柱穴より出土した。須恵器の杯と思われる。ローリングを受け、器面が剥落している。淡灰青色を呈し、胎土には雲母粒を含み、焼成は良好である。

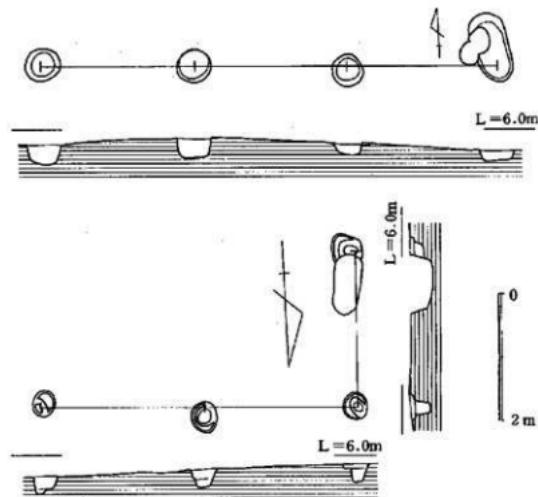


Fig. 8 SB-05・06実測図 (1/80)

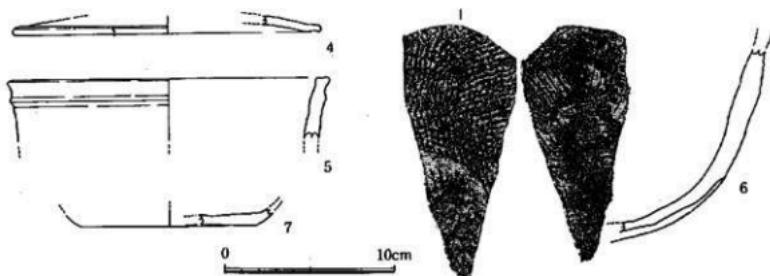


Fig. 9 SB-05・06出土遺物実測図 (1/3)

(2)河川・溝

SD-03 Fig. 4 PL.3

1区で検出した東西方向の溝状遺構である。西側は中世の溝SD-02に切られており、東端部は削平されている。東西に直線的に伸びており、調査区内で8.5mを確認した。東端部で幅0.8m、中央部で幅1.0mを測る。溝の横断面形は皿状を呈し、最も残りの良い部分で、深さ0.2mである。遺構の覆土は黒褐色粘質土であった。

土師器片17点、須恵器片11点、瓦片1点が出土した。8世紀後半の遺構であろう。

SD-03出土遺物 Fig.10 PL.4

8は土師器の杯で、高台が付く。体部は丸みを持つ。底部は回転ヘラ削りで、内面にはヘラ研磨を加える。淡褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼き歪みがある。

9～13、15は須恵器である。9は杯の口縁部で、小片のため法量は不正確である。体部が丸みを持ち、口縁端部はわずかに外反する。灰青色を呈し、焼成は良好である。10～12は高台の付く杯である。13は底部がないが、同様の器種であろう。10は小型、12、13は大型である。いずれも、体部が強く屈曲して底部から立ち上がり、体部と底部が明瞭に区別されるもので、口縁は端部でやや外反する。底部には断面逆台形の輪高台を貼付する。底部は回転ヘラ切りのまま放置され、10には板圧痕がつく。内底には部分的なナデを加える。灰青～淡灰青色を呈し、焼成は良好である。復元口径は10が11.9cm、11が14.0cm、12が14.0cm、13が15.8cmである。15は壺であろうか。偏平な球形の体部の外面に櫛描き波状文を巡らす。赤味のある淡灰青色を呈し、焼成はやや不良である。

14は平瓦の小片である。器面の残りが悪いが、凸面に繩目叩き、凹面に布目が残る。

16は上部器の壺である。最大径は口縁にあり、内すばまりの胴部である。胴部外面と口縁内面が刷毛目、口縁外面が横ナデ、胴部内面がヘラ削り調整である。淡褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好である。

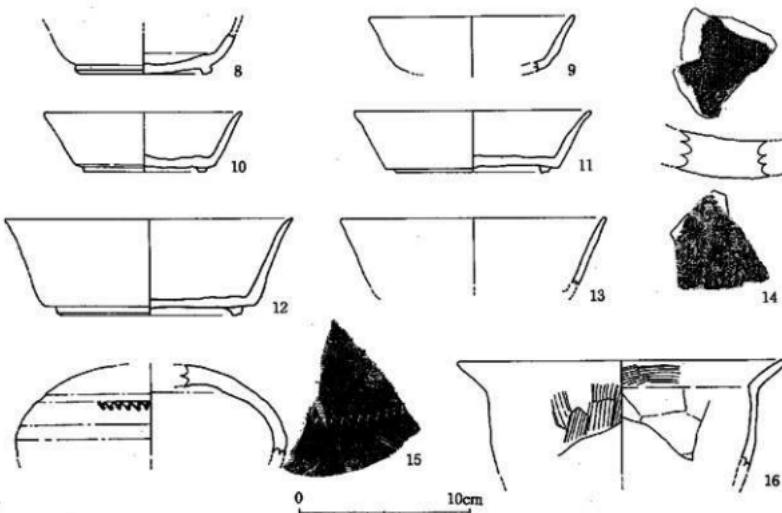


Fig.10 SD-03出土遺物実測図 (1/3)

SD-10 Fig. 5, 6

2区で検出した古河道である。調査区内で確認できたのは西に向かってゆるく下る落ちぎわのみであり、河というよりも遺跡のへりを確認したとするべきかもしれない。土層断面はFig. 6の2区南壁土層断面図のなかに見ることができる。基盤土は砂ないシルトで、この上に遺構検出面を覆っている遺物包含層が堆積している。2区は1区に比べて0.6mほど検出面のレベルが低く、2区全体がすでに氾濫原の中に含まれている可能性もある。また、基盤上である砂層の中からは遺物が全く出土しなかった。

弥生土器、土師器、須恵器、瓦、移動式カマドなどの破片が出土している。時期的には古代以前のものに限られる。

SD-10出土遺物 Fig.11 PL. 4

17は弥生時代中期の彫形土器である。口縁は逆L字形に強く屈曲する。器面が削落して調整は不明である。淡灰～淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。

18は須恵器の坏である。体部は丸みを持ち、低い高台を貼付する。外底はヘラ切りで、板圧痕がかかるに残る。灰青色を呈し、焼成は良好で歪みがある。

19～21は瓦の小片である。19は九瓦の玉縁あたりの破片で、凸面に繩目叩き、凹面に布目が残る。黒色に燃しており、胎土は精良で、焼成はやや不良である。20、21は平瓦の小片で、同一個体の可能性が強い。ともに厚手のつくりで、凸面に繩目叩き、凹面に布目がある。燃しにより、黒～灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で、須恵質を呈する。

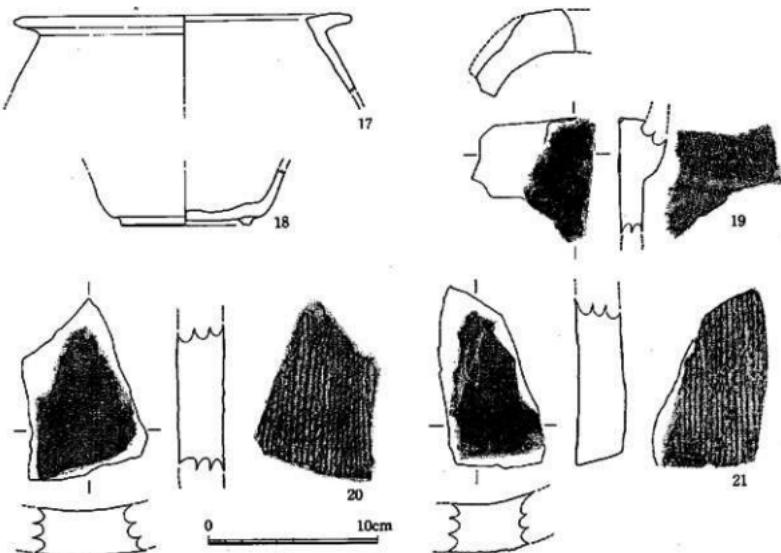


Fig.11 SD-10出土遺物実測図 (1/3)

4. 中世の遺構と遺物

中世の遺構は溝2条のみである。いずれも水田水利に係わる溝と見られる。調査地周辺は、中世には広く水田となっていたものと考えられる。

SD-01 Fig. 4、6

1区の西端に検出した溝である。水路と見られる。調査区西端から東へ4~5mの位置に溝の東側上端があり、ここで古代以前の遺構を全て切っている。西側の上端は1~2区間にある。土層断面はFig. 6の1区南壁土層断面図のなかに見ることができる。基盤土は粘質土で、溝の覆土は砂、シルト、粘質土である。横断面形はおおむね逆台形で、岸は水流により抉れている。

土師器片24点、須恵器・陶器の破片が11点、黒曜石片が1点出土している。

SD-01出土遺物 Fig.12 PL.5

22は土師器の瓶である。把手はヘラ成形による。瓶内面はヘラ削りを施す。淡橙色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を少量含み、焼成は良好である。23は陶器の破片である。甕もしくは壺であろう。外面に沈線が巡っており、肩の部分であろうか。内面に同心円文のアテ具痕が残る。胎土は練りが不足し、灰褐色、乳白色、黒色の粘土が混ざる。焼成時に気泡が入る。外面に暗茶色の釉をかけている。

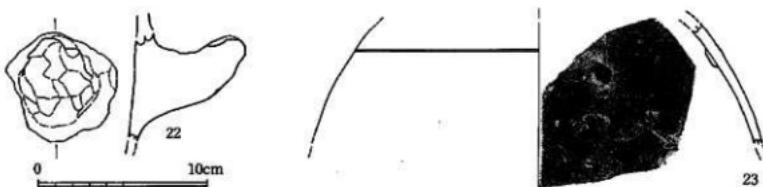


Fig. 12 SD-01出土遺物実測図 (1/3)

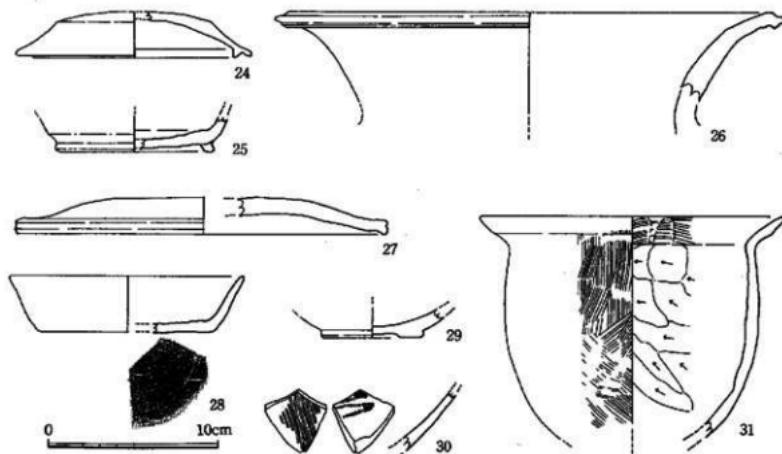


Fig. 13 SD-02出土遺物実測図 (1/3)

SD-02 Fig. 4

1区の中央部に検出した溝である。遺物包含層の上面から掘りこまれており、水路と見られる。SD-01と同時期の遺構と考えられる。調査区を蛇行しながら縱断しており、溝の方向は現在の道路の方向に近い。本流であるSD-01から、東側の水田に引水するための水路であろう。西端で幅1.7m、東端で0.9mを測る。横断面形は皿状を呈し、深さは0.3mである。溝の覆土はシルトであった。

包含層から流出した遺物が少量出土しており、土師器片、須恵器片などがある。

SD-02出土遺物 Fig.12 PL.5

24～26、28は須恵器である。24は蓋である。ロクロ成形後、口縁内面に三角突帯を回してかえりをつくる。天井部は回転ヘラ削り、内面にナデ調整を加える。淡灰青色を呈し、焼成は良好。復元口径は14.0cm。25は杯である。体部は丸みを持ち、高台は外へ低く踏ん張る。底部を回転ヘラ削りし、高台を貼り付ける。灰青色を呈し、焼成は良好。26は甕の口縁部である。外湾して開き、端部に粘土帯を貼付し、少し下方に垂らす。ロクロ成形後、端部内面にナデを加えている。灰青色を呈し、焼成は良好である。28は杯である。小片のため法量は不正確。底部に、回転ヘラ切り後刷毛目調整を加えている。淡灰青色を呈し、焼成は良好。

27、31は土師器である。27は蓋の口縁部片である。端部は面取りする。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ヘラナデを施し、口縁部は横ナデする。暗橙色を呈し、胎土は精良で雲母粒を含み、焼成は良好である。31は甕である。砲弾形の胴部に短く開く口縁部が付く。胴部外面は刷毛目、内面ヘラ削り。口縁外面横ナデ、内面は指痕痕の上から刷毛目調整する。淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒・雲母粒を多量に含み、焼成は良好である。

29、30は陶磁器である。29は白磁の碗で、蛇目高台の底部片である。胎土は黄味のある白色で、釉は白色の半透明釉である。体部下端から下は露胎とし、疊付にかかった釉を掻き取っている。30は青磁である。体部の小片で、内外面に備描きで施文する。胎土は淡灰色を呈し密で、緑味の強い透明釉をかける。体部下半は露胎である。

5. 包含層出土遺物 Fig.14, 15 PL. 5, 6

1、2区の遺構検出面を覆っていた古代の包含層から多量の遺物が出土した。この内、完形に復元できたものや、特徴的な遺物をここで取り上げる。

32～34は弥生土器である。いずれも甕の底部片である。32は底部が分厚く、外底が窪む。外面に刷毛目、外底にナデが見られる以外は、器面が剥落して調整不明である。33も分厚く、外底には短い脚を付ける。外面から脚内面の下端まで横ナデ、他はナデ調整。34は薄手の平底である。内外面はヘラナデ、外底は指頭痕をナデ消している。

35、36は古墳時代後期の上器である。35は須恵器蓋片である。器高の高い蓋の口縁部で、端部を軽く面取りしている。ロクロ成形後、天井部の狭い範囲に手持ちヘラ削りを施している。復元口径14.8cm。36は土師器の蓋である。口縁部の小片で、端部、かえりともに丸くつくる。ロクロ成形し、天井部は回転ヘラ削り、内面にはナデ調整を加える。橙褐色を呈する。

37～55は古代の土器である。

37～41は須恵器である。37は蓋で、偏平なつまみが付く。口縁端部のかえりは痕跡的で、ロクロ成形後、内面を一部ナデ調整する。38は蓋で、口縁端部は肥厚し、面取りされる。天井部は回転ヘラ切りのままである。39は杯である。ロクロ回転は時計回りで、外底は回転ヘラ切り。口径13.8cm。40は

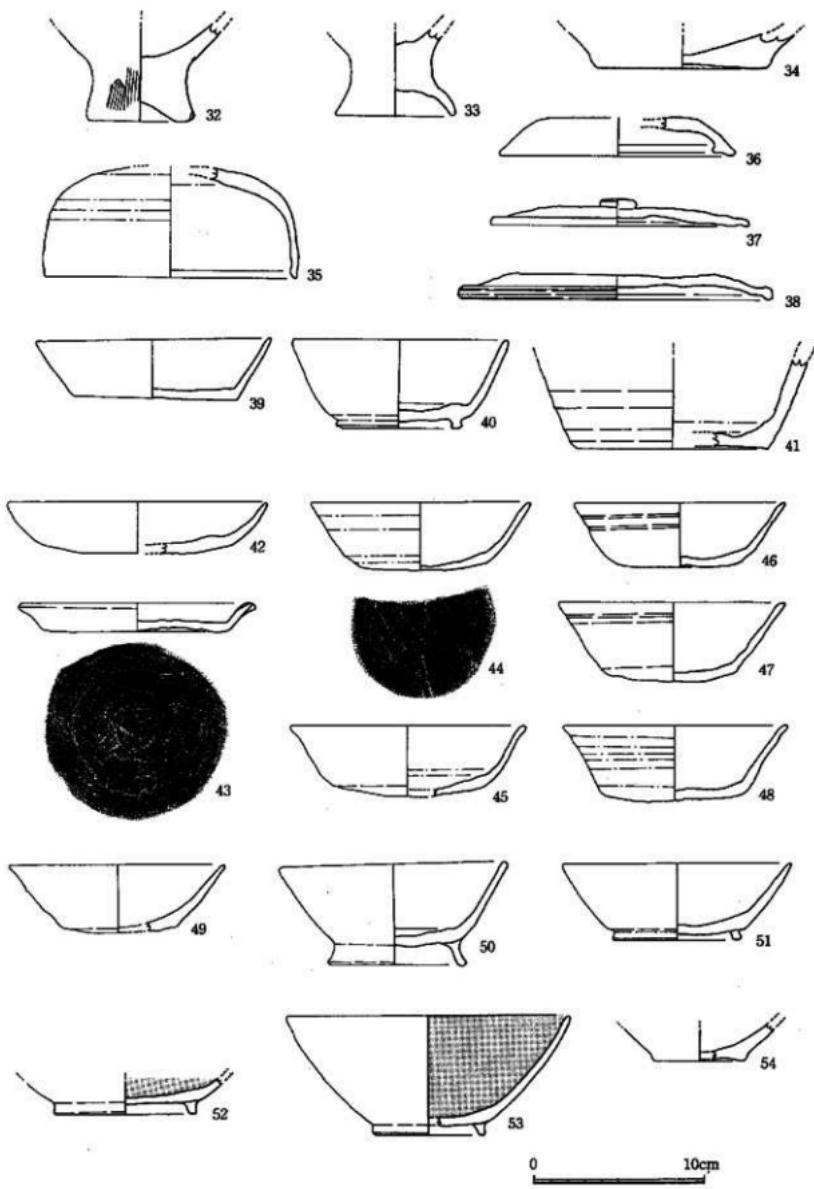


Fig. 14 包含層出土遺物実測図・I (1/3)

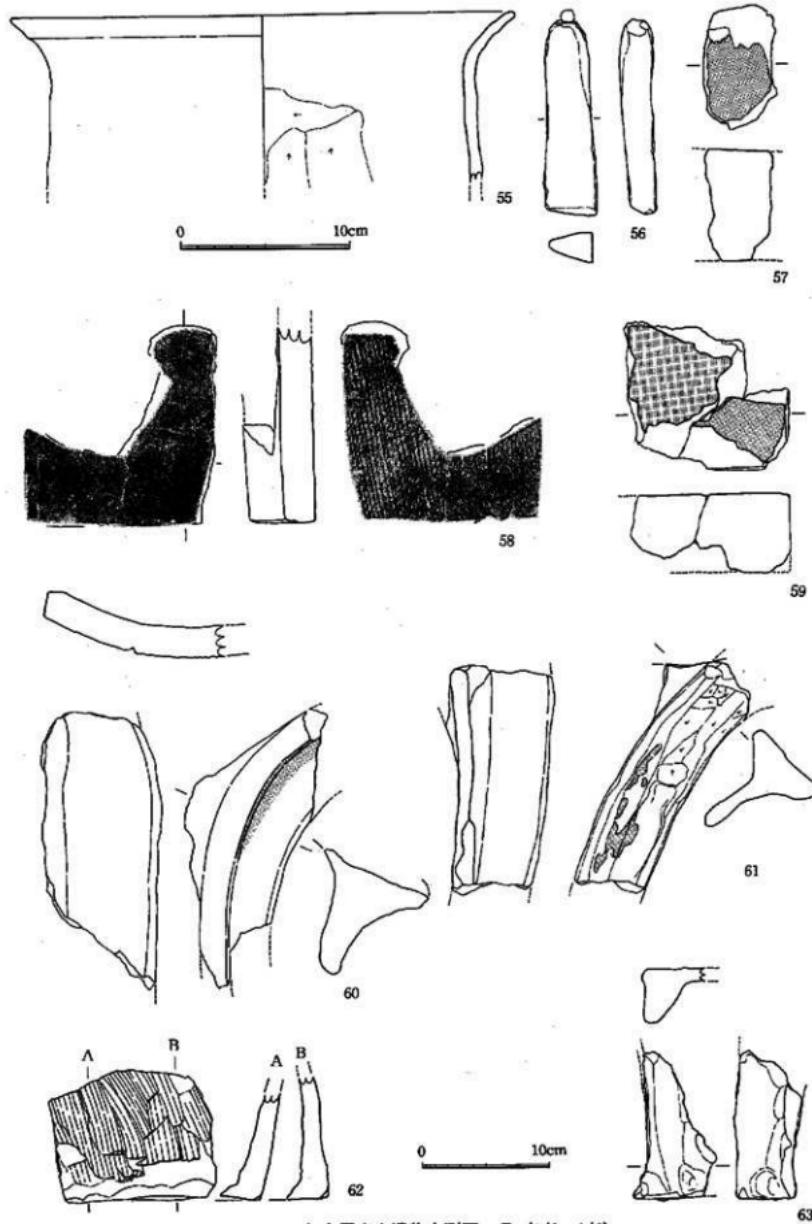


Fig. 15 包含層出土遺物実測図・II (1/3, 1/4)

壺で、高台が付き、体部の立ち上がりは丸みを持つ。底部は回転ヘラ切り。口径12.7cm。41は壺の底部であろう。やや上げ底気味の平底で、外面は回転ヘラ削り、内面は指頭痕をナデ消している。

42～53、55は土師器である。42は丸底の壺である。内外に回転ヘラナデを施す。底部は回転ヘラ切りである。復元口径15.2cm。43は皿である。底部は回転ヘラ切りで、板圧痕がある。成形時の歪みがあり、口径は13.6～13.9cmである。44～49は壺である。いずれも底部は回転ヘラ切りしたまま放置する。内面にはロクロ目をよく残している。器面が剥落したものが多いが、外底に板圧痕の残るものもある。口径は、44が13.0cm、45が14.0cm、46が12.5cm、47が13.5cm、48が13.2cm、49が12.4cmである。50は碗である。高台は比較的高い。器面が剥落しているが、底部は回転ヘラ切りである。口径13.5cm。51も碗である。高台は低い。内面にヘラ磨きを加える。底部は回転ヘラ切り後、ナデ調整する。52、53は内面に炭素を吸着させた黒色土器A類の碗である。52は底部片で、ナデ調整。53は径の小さな高台を貼付する。内面に粗いヘラ磨きを施す。外底はヘラ削り。55は甕の口縁部片である。器面が剥落しているが、内面にヘラ削りの痕跡を留めている。

54は越州窯系青磁である。碗の底部であろう。胎土は淡緑灰色を呈し、オリーブ色の釉を施す。底部は露胎。2次加熱により釉が剥げかかっている。

56、57は砥石である。56は頭頂部に孔の痕跡があり、折れた後も研磨して使用している。三角柱状を呈しており、3面を砥石に用いている。57は大型の砥石の一部で、表裏2面を用いている。

58は平瓦である。凸面に綱目叩き、凹面に布目痕が残る。59は磚である。器面は剥落しており、残りが悪い。割れた部分に粘土帯を積み上げた痕跡が見える。素文。厚さ6.2cm。

60～64は移動式カマドの破片である。互いに接合しない。60、61は焚き口上部の破片で、席が付く。焚き口にはススが付着している。61は上端に上部受け口の一部が残っている。63は焚き口の下端部の破片である。62は脚部の破片で、外面には崩毛目、内面には粗いヘラ削りを施す。接地面は調整を行っていない。

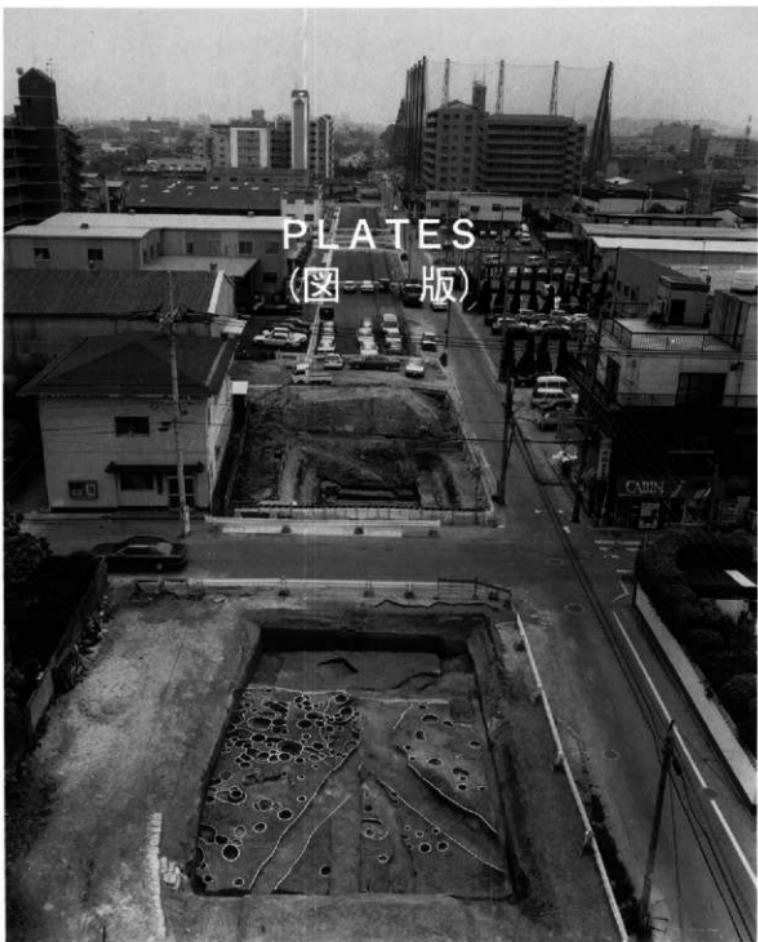
IV. おわりに

第2次調査で検出した遺構は、古墳時代前期の溝1、古代の掘立柱建物2、溝1、河川1、中世の水路2である。

古墳時代前期の遺構は溝以外には全く検出されず、伴出上器は壺形土器2、甕形土器1の計3個体のみに限られる。既に述べたように、2次調査地点は沖積帯高地上に位置しており、この東西では地形が落ちているが、古墳時代前期の溝はこの微高地の最も高い位置をL字形に巡っており、北側の調査区外で方形に結ばれている可能性がある。溝以外に遺構、遺物が全く見当たらないことも併せて考えてみると、ここが墓域であった可能性も否定できないのではないか。

古代の集落は検出遺構が少數であるわりには遺物の出土量が多い。時期的には8世紀後半から9世紀前半にはぼ限られ、輸入陶磁器や瓦、磚などを持った集落である。これは、東那珂遺跡第1次調査で検出した集落に、時期的にも内容的にも酷似している。1、2次調査地点は約250m離れており、この間には河川の氾濫原が広がっている。1次調査の報告書中にも述べたように、河川によって幾つかに別れて存在する島状の微高地に、奈良時代の終わり頃になって突然いくつもの集落が形成され、そして極く短期の内にその役目を終えて、平安時代の初頭には集落が廃棄された状況が想定されるのである。

PLATES
(図版)



1区から西侧竹下駅方面を望む



1. 調査区全景（北東から）



2. 1区全景（北東から）



1. 1区全景（南東から）



2. 2区全景（南西から）



1. 1区SD-04 (南から)



2. 1区SD-03 (東から)



3. 1区南壁土層①(北西から)※東から西へ①→⑤



4. 1区南壁土層② (北西から)



5. 1区南壁土層③ (北西から)



6. 1区南壁土層④ (北西から)



7. 1区南壁土層⑤ (北西から)



8. 2区南壁土層 (北西から)

PL. 4

SD - 04



1



2



3

SD - 03



8



10



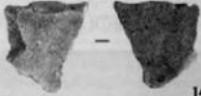
11



12

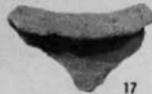


15



14

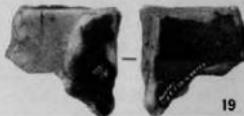
SD - 10



17



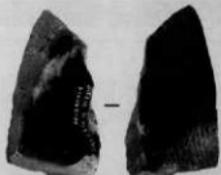
18



19

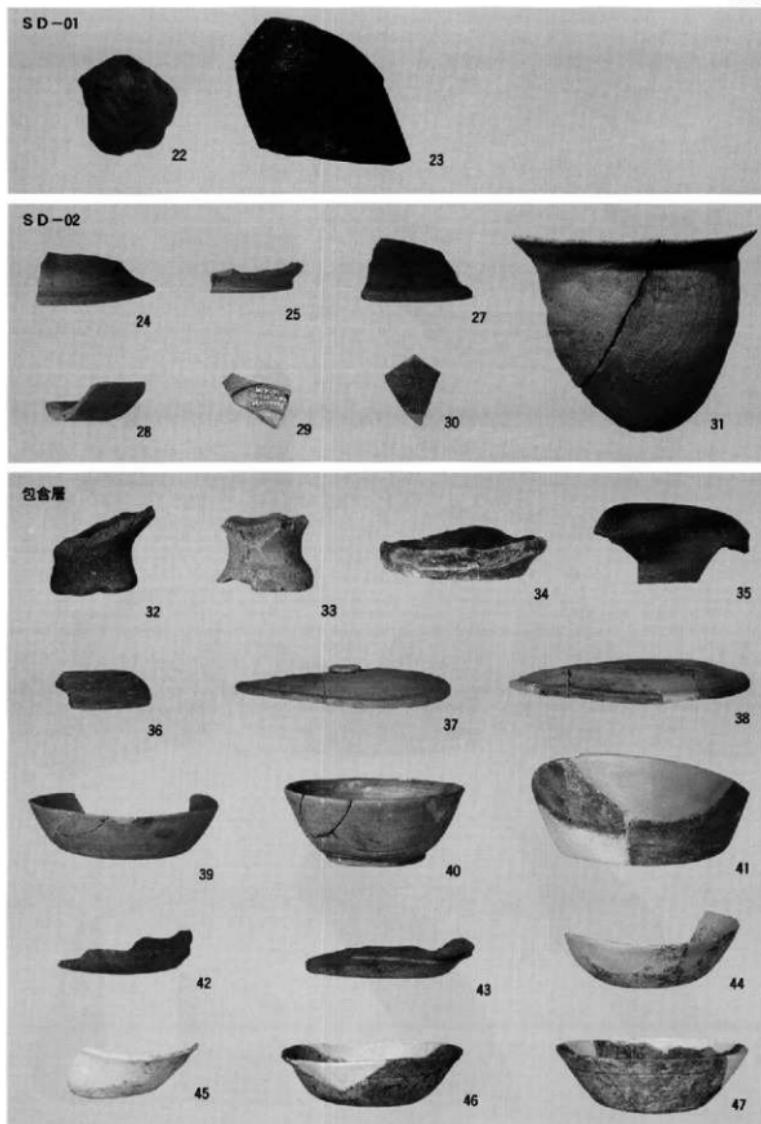


20



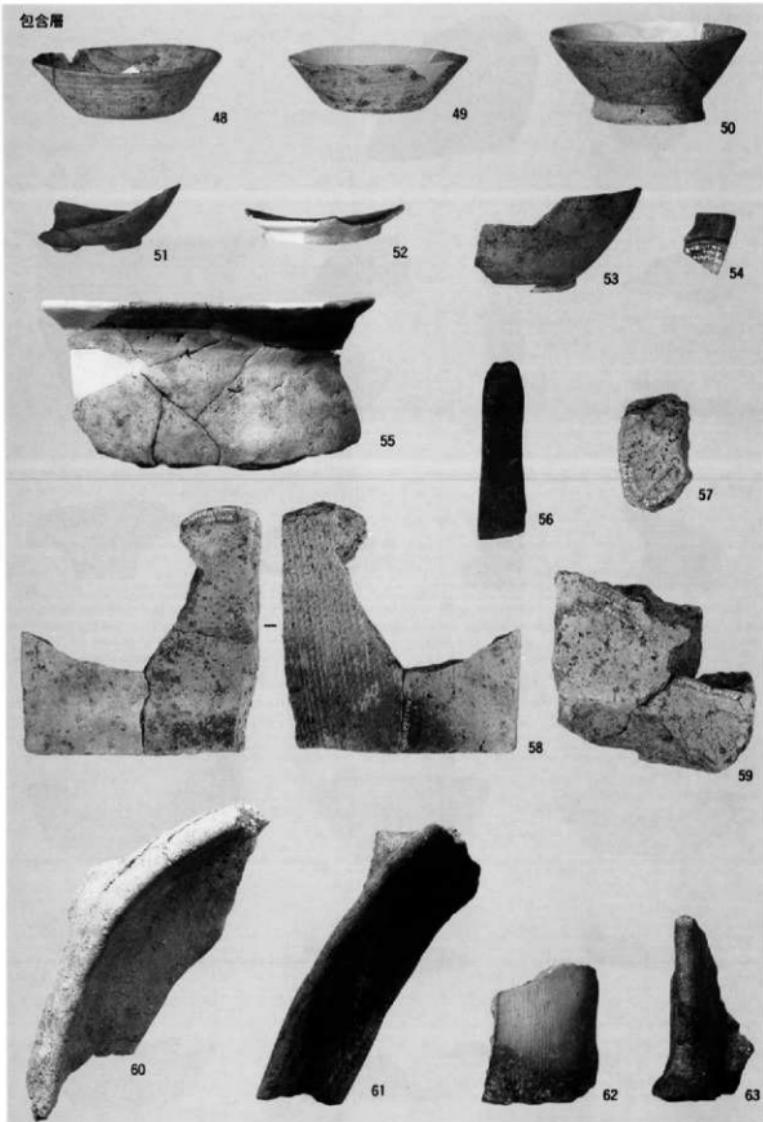
21

出土遺物・I



出土遗物・II

包含層



出土遺物・III

福岡市
東那珂遺跡2
— 東那珂遺跡第2次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書第460集

1996.3.31

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 (株)嶋井精華堂
福岡市博多区吉塚1丁目34-3

